RAKUWA
lecture of health

らくわ健康教室
2015年4月22日

回復期病棟って どんなところ?

洛和会音羽リハビリテーション病院
リハビリテーション部　主席係長　理学療法士　江口（えぐち） 勇気（ゆうき）

発展、ともに前へ…
洛和会ヘルスケアシステム®

らくわ健康教室　2015年4月22日

回復期病棟ってどんなところ？

リハビリテーションの流れ

患者さまへのリハビリテーション（以下、リハビリ）には、急性期、回復期、維持期という3段階があります。それぞれの特性は以下のとおりです。

急性期リハ

↓ 急性期病床（早期離床・早期リハ開始）

回復期リハ

↓ 回復期病棟など
（機能回復・ADL向上・自宅復帰）

維持期リハ

在宅：通所リハ・訪問リハ・短期入所など
（生活機能の維持・向上、介護負担の軽減、自立生活の推進、QOLの向上）

急性期とは、病気発生から1～2週間ぐらいまでの時期です。リハビリは、廃用症候群（寝たきりを引き起こす筋力低下など）を防ぐため、入院当日ないし翌日にはベッドサイドで始めます。

回復期とは、病気発症後2週間ぐらいたち、症状がある程度安定してきた時期です。リハビリは多くの場合、専門の病棟や訓練室、病院で行います。

維持期とは、自宅や施設に戻ってからの時期です。リハビリは、回復期リハビリで回復した機能を維持するために行います。

洛和会ヘルスケアシステムでは本年4月に洛和会音羽リハビリテーション病院を開設しました。

リハビリテーションチームについて

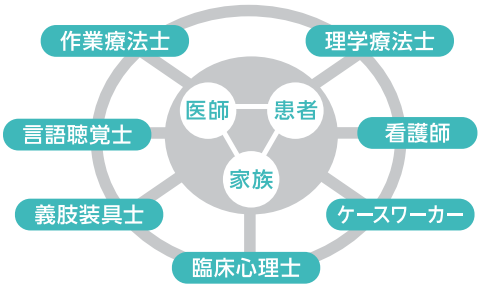
そもそもリハビリとは、病気やけが、加齢により、心身の機能が低下した状態になったときに、その能力の回復や維持、障害の悪化予防を行うことです。

リハビリの主な対象疾患は、以下のとおりです。

- 脳卒中、そのほか脳疾患、脳外傷
- 脊髄損傷、そのほか脊髄疾患
- リウマチを含む骨関節疾患
- 脳性麻痺（まひ）を含む小児疾患
- 切断
- 呼吸器疾患
- 循環器疾患
- そのほか（がん手術や外科手術後のリハビリなど）

これらの疾患のリハビリを、さまざまな専門職がチームを作って行います。

リハビリテーションチームの構成職種



回復期病棟で特にチーム医療が必要な理由

リハビリにおける回復期は、機能・ADL（日常生活動作）ともに向上する時期です。

しかし同時に、心理、社会、経済的問題も多々生じやすい時期といえます。

担当の医師のみでなく、看護師、ケアワーカー、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、ケースワーカー、歯科医師、薬剤師、臨床心理士などが協力し、チームとして患者さまに関わる必要があります。

回復期病棟について

回復期病棟（回復期リハビリテーション病棟）とは、以下のような病棟のことをいいます。

- **脳血管疾患または大腿骨頸部骨折などの患者さまに対して、ADL（日常生活動作）能力の向上による寝たきりの防止と家庭復帰を目的としたリハビリを行う病棟。**
- **医師、看護師、理学療法士、作業療法士などが共同でリハビリプログラムを作成し、これに基づくリハビリを集中的に行うための病棟。**

全国に1,088病院、1,355病棟、60,144床（当初の整備目標であった「人口10万人あたり50床」に近い47床）あります。

対象病名と入院期間は以下のとおりです。

回復期病棟の対象病名と入院期間

疾　患	発症から入院	入院期間
脳血管疾患、脊椎損傷、頭部外傷、くも膜下出血のシャント術後、脳腫瘍、脳炎、急性脳症、脊髄炎、多発性神経炎、多発性硬化症、腕神経叢損傷等の発症または手術後、義肢装着訓練を要する状態	2カ月以内	150日
高次脳機能障害を伴った重症脳血管障害、重度の脊髄損傷、頭部外傷を含む多部位外傷の発症または手術後	2カ月以内	180日
大腿骨、骨盤、脊髄、股関節または膝関節、2肢以上の多発骨折の受傷、または手術後	2カ月以内	90日
外科手術または肺炎等の治療時の安静により廃用症候群を有しており、手術後または発症後	2カ月以内	90日
大腿骨、骨盤、脊髄、股関節または膝関節の神経、筋または靭帯損傷後	1カ月以内	60日
股関節または膝関節の置換術後の状態	1カ月以内	90日

回復期病棟として国に認められるための基準は、以下のとおりです。

- **脳血管リハビリなどの届け出がされていること**
- **患者さま一人につき病室が6.4平方メートル以上あること**
- **患者さまの利用に適した浴室および便所があること**
- **廊下の幅が基準以上であること**
- **リハビリを1日あたり平均2単位以上実施していること（1単位は20分）**

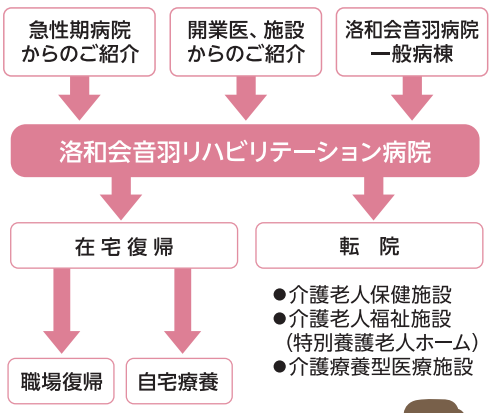
※ほかにも基準が設けられています。

洛和会音羽リハビリテーション病院

当院は、リハビリ専門の病棟を2病棟（100床）保有しています。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が全部で82人いて、京都府内で2番目の多さです。

患者さまは、整形外科疾患、脳血管疾患の方が大半です。（廃用症候群もあります）

洛和会音羽リハビリテーション病院の位置づけ



当院での取り組み

- 転院日からリハビリ担当者と担当看護師、介護福祉士などが共同し、基本動作チェックリストを作成します。
- リハビリの方向性の確認のために、早期にご家族との面談を実施します。
- できる限り理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が1日3時間のリハビリ介入をします。
- 生活そのものがリハビリであるという観点から、病棟でもリハビリを行います。

基本動作チェック表をベッドサイドに貼って、チーム全員が患者さまに統一した関わりをもてるようにします。ベッドの柵をどこにつけるか、コルセットは必要か、フロア移動の際の注意点は…など、細かく記載します。

以下、病院の施設内をいくつか紹介します。

病室

4人用の病室。介護用ベッドのほか、お手洗いも完備。車いすを置くスペースも十分です。

病棟廊下

幅が1.8m以上あり、手すり付きで距離も長いので、歩く練習ができます。

免荷式ドレッドミル

上から引っ張って体を支え、歩行訓練を行います。

関節可動域訓練

理学療法士の指導で訓練します。

まとめ

回復期はリハビリによる機能回復に非常に重要な時期です。
回復期病棟では、退院後の生活を見据えた生活のリズムの組み立てや介護サービスの調整など、さまざまな職種が協力して退院を支援しています。